

—詩的ユートピアの研究—

# ウィリアム・モリス

—「愛のゆくへ」その(一)—

齋藤 公江

「何にせよ楽しみなんてものを要求する権利は僕にはない—愛と仕事、ただこの二つだけだ。」

1855年8月、モリスとバーン＝ジョウンズ (Edward Burne-Jones) はフランスへの旅の終わりに、聖職者になる希望を棄て、芸術に身を捧げる決意をした。バーン＝ジョウンズは画家、モリスは建築家となるべく。ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti) との出会いはモリスを更に画家を志す者へと変えた。この画家志願はオックスフォードの建築家ストリート (George Edmund Street) の事務所で働きはじめてからわずか半年後のことであった。何がモリスをそこまで駆り立てたのであろうか。1896年10月、62歳で死去するまで、止むことなく続けられたモリスのあの多岐に亘る創作活動と社会運動は正に「楽しみなんてものを要求する権利は僕にはない」と語っているかのようである。だが、夥しい作品群を目にする時、モリスが歩み続けたその途方もない<sup>みちのり</sup>道程を、「愛」と「仕事」という二つの言葉が余すところなく言い表わしているように思える。

モリスは、生涯なん度か旅をした。その最大のものは二度に亘るアイスランド (Iceland) への旅であった。だが建築家から画家へと志望を移してゆき、更にデザイナーであり工芸家であり、又、文学者であると同時に社会主義者として多くの社会運動を行ったモリスの生の軌跡そのものが生涯に亘る長き「旅」であったといえよう。それは中世を愛したモリスに適しき巡礼の道行きとも呼べる「愛」を求めての‘Quest’—<sup>せんぐ</sup>欣求—の旅であり、又、高次限の「夢」に支えられた旅であったとも言える。即ちモリスのパターンデザインそのものの如き微妙な変化

を伴った繰り返しのパターンであり、完結した円環運動とも呼べる生のパターンである。

「夢」はモリスの全作品にとり、手段であり方法であり、「愛」と「仕事」のための原因と結果でもあった。即ち、社会運動をも含めたモリスの全活動、及び作品を広義に定義し、それを「仕事」と呼ぶならば、他の側面からみれば、「愛」と「仕事」とはその原因であり結果でもあった「夢」に支えられた目的そのものともなる。そこで「愛」「仕事」「夢」はそれぞれ欣求の「旅」という一形象の、視点の異なる一側面であって、モリスの生の思想の根底に互いに分ち難く結ばれ合っている。それらすべてに押し込まれるようにして、モリスは欣求の「旅」としての生を<sup>まわら</sup>流転した。流転という言葉を用いるのも当然死生観そのものにまで関わるような変化を伴っているという前提のもとにである。

本論においてモリスの初期及び中期の散文、及び物語詩を通して芸術家にして社会主義者であったモリスの「旅」の中で、夢に支えられた「愛」がどのような変容を遂げ、何処へ到るのか、という「愛」のゆくへを探ってみたい。本稿は「夢」の本質を探るものではないが、「愛」と「仕事」とが原因であると同時に結果でもあり、更には目的そのものでもあった「夢」に支えられ、分離不可能な一形象を成している以上、夢についての言及も避けられない箇所がでてくるであろうことを附記しておく。

## 第1章 試す愛

「夢」 A Dream

1856年、月刊の同人誌オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン (Oxford and Cambridge Magazine) の創刊号が一月に出た。オックスフォード運動もニューマン (J. H. Newman) のローマ・カトリックへの改宗をもって下火となってしまった中で、僧院建設を諦めると共に、自分達の想いと創作の発表の場としてこの雑誌の発刊が創案された。発案者はディクソン (R. W. Dixon) であった。かつて、「この時代に対して聖なる戦いを挑む十字軍」として兄弟団ブラザーフッドを作り、その本拠として修道院構想もあった訳だが、今や形を変え雑誌となり、人数も7名に限定された。聖転者志願、僧院構想から出発し兄弟団の形成、更にその組織の抱く思想と創作の場としてのオックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン<sup>2)</sup>の発刊へと向かった一連のモリスの活動は、出発点において極めて宗教的色彩の濃いものであったことが分かる。

作品「夢」は三月号掲載分である。モリス文学全般に流れる語りとしての「夢」ともいうような、「かつて夢をみた」として語り手の「私」が語り始める形式をとる。夢は炉辺で4人の男達が自分達の見聞きした不思議な‘tales’を語るという内容で展開する。一番年長の男が父親から聞いた話は、彼らの住む土地の赤色をした峰に洞穴があり、そこに入って帰ってきた者はいないという。父親からその洞穴についてあまりにも多くの不思議な話を聞いた結果、いつの間にかその男の心の中にひとつの話‘story’が出来てしまった。それをこれから皆に話そうという趣向のものである。語り手「私」がみた夢の中で、父親から聞いた話をもとに、ひとりの男によりどうにか作り上げられた話は、夢という枠組の中で、更にその男とは別のもう一人の男が現実をもとに想像の世界を語るという重層構造になっていて、そのような点にすでにモリスらしい夢の扱い方がはっきりと出ている。即ち、夢の中の第一の男の語りとしての‘story’は途中で第二の男の語りとして受けつがれ、民衆から民衆へと語り継がれる伝承のごとき形態をとって、‘dream’から‘vision’へと移行し、語りつづけられる<sup>3)</sup>。第二の男の語り口は熱っぽく、第一の男の淡々とした語り方とは異なり、幻想的内容にも拘らず現実味を帯びている。

話は一軒の不思議な家の中で共に育てられたいとこ同

志である若き騎士ロレンス (Lawrence) と、その家の娘エラ (Ella) がやがて愛しあうようになるが、気持とは裏腹に、緩やかな愛へとは進んでゆかない。やがて大きな戦いはじまり、ロレンスが出発を考えていると、陽気に部屋に入ってきた許婚エラの姿をみて彼女の心の全てを欲しいという気持に駆られる。だがエラはロレンスの求めには応じず戦いくさにいつでも戦うのは自分への愛の為の戦いであって望ましいと告げる。その要求に対しロレンスは高次元の愛‘a higher love’の為、即ち義務の為、神の為に戦うのだと答える。エラの要求する愛は義務の観念など全く共なわない情念の戦とひとつになった凄まじい愛である。口論の末 Ella は、今夜私の為にあの洞穴に泊るよう、さもなくば貴方の勇気を疑うといい<sup>4)</sup>、愛を勇氣にすりかえてロレンスの愛を試そうとする。しかしロレンスも、明日、月が出るまでに自分が戻らなければ、君もその赤い峰の洞穴にゆき、自分を探すという欣求—‘quest’—を死によって終わるのでない限り止めないで欲しい、と願う。ロレンスが出発するが戻らない。‘quest’という言葉が用いられている以上、作者モリスの中でロレンスとエラという若き二人の愛は、最初から聖なる戦によって勝ちとられるべきもの、という「愛」に対する概念を伴って、エロスの否定があった筈である。更にこの点から地上の生と愛を巡礼と見做しているであろうという図式は容易に想像ができよう。

約束どおりエラも出かけるが戻らない。

ひとつの国で起きた戦はロレンスとエラという二人の恋する若者の愛の為の聖戦に置き替えられ、それはマロリー (Sir Thomas Malory) の「アーサー王の死」、(Morte d' Arthur) の熱烈な愛読者であった物語作者モリスに、欣求という形で聖杯を求めるかのように二人を愛の為の巡礼へと旅だたせた。それは互いの愛の深さを計りあうという形で、旧約における神のごとく愛と妬みが同一のものであるような世界、アブラハムの信仰を試してイサクを生贄に捧げよと命じた激しい砂漠の神の世界<sup>5)</sup>でもある。

だが語り手の第一の男が、二人はお互いに出会うことはなかった。これからも出会えるのだろうかと言いつつ、作者モリスはその男を‘So spoke Hugh’と突然生

彩を帯びた形でその男の名ヒューで登場させる。この作品の出だしで ‘the eldest’ という表現で語り手は漠然と示されていたに過ぎなかったが、その男の ‘story’ が終わると同時に語り手の実名が読者に知らされる点に、夢の中ではあるが現実味のある、語りの第二の段階へと入っていった事を示すモリスの手法なのであろう。前述したようにモリスにおいては夢といっても ‘dream’ と ‘vision’ があり、講演「未来の社会」(The Society of the Future) の中で、ヴィジョンをみる人間 ‘Visionaries’ とは実際的な人間 ‘Practical people’ であると、この二つは明確に区別されている<sup>6)</sup>。後期の作品「ユートピア便り」(News from Nowhere) では夢よりもヴィジョンを、 ‘a vision rather than a dream’ と言いつつ、物語の最終末が ‘dream’ ではなく ‘vision’ で終わっているように、この初期の作品において早くも ‘dream’ は ‘vision’ となって終わることになる。

‘the eldest’ が語る恋する二人の ‘story’ の結末を、  
聞

き手の一人ジャイルズ (Giles) が激しく否定し、話を一歩前進させる。筋は更に幻想的になるが、想像力の所産としての幻想性は、幻想的であるが故にその夢みる個人にとっては一層現実的であるというような逆説が示されているようだ<sup>8)</sup>。即ちいつの間にか生まれた ‘story’ を語るとヒューは最初にことわったにも拘らず、二人は二度と会う事はなかったそうだ、 ‘the people say’ とし、そこまでの部分は人から聞いた話をヒューが語ったのに過ぎない事が示される。そこでジャイルズが本当の結末を語るように激しく促すのである。昼みる夢よりも、もっと現実的な夢があるとして、モリスは「ジョン・ボールの夢」(A Dream of John Ball) の中で、幾層もの夢の定義を行っているが、より一層幻想的であるが故に極めて現実的なヒューの語りが続けられる。

ヒューの話の続きはヒューが医者であることを知らせることから始まる。彼が疫病におかされた町の海辺の病院の中で患者をひとりひとり見廻っていると、一人の尼僧が見廻りをしているのに気づく<sup>9)</sup>。彼がとあるベットの所までくると、そこには疫病に倒れた男ではなく、剣

で傷ついた男がいた。夕方へと時が進む頃、尼僧はその男の看護にくる。日が暮れる。だが陽の光が二人を包み、尼僧は白衣に身を包んだ美しい<sup>こがね</sup>黄金色をした髪<sup>の</sup>乙女へと、又傷ついた男は立派な騎士の身なりをした美しい若者へと変貌し、魂と肉体の双方でもう一度と、いいながらも次の瞬間には早くも別れの言葉を交わし二人は別れる。その後その場で呆然としているヒューをみてあの尼僧が ‘This is no time for dreaming ; act ! と声をかける<sup>10)</sup>。その夜海辺を歩いていたヒューは風が東風から西風—WEST WIND—に変わっている事に気づき喜ぶ。西風は豊穡をもたらす印であり、シェリー (Percy Bysshe Shelley) の「西風頌」 ‘Ode to the West Wind’ の中では、枯れ葉が新たな生をとくもたらすように／私の古い思想を宇宙へと追い散らせよ、との願いをかけることのできるような「生」の風なのである。ヒューの語る西風と大きく寄せては砕ける緑の大波の描写により、互いに別れ別れになった後、又地上に現れて、肉体と魂の双方で相まみえながらも、やはり地上においては結ばれることのない二人の天上的な昇華された愛をモリスは讃えているともいえる。しかし肉体をもたない男女の愛はやむことなき想いへと連なり、狂おしいまでに想いつづけるという点において極めて地上的なエロスの愛であり、禁欲による純潔を美しいと錯覚するエロスの極みでもある。いづれにせよ豊穡の印である西風が生をもたらすものとして描かれているのは間違いない。それはその後すぐにジャイルズが見たある夏の真昼の ‘vision’ が語られ

るからである。或いは、尼僧の ‘This is no time for dreaming : act !’ の ‘dream’ からジャイルズの ‘vision’ へと言葉が変わっているからである。西風は生の象徴としての伏石として置かれ、おぼろな夢としての ‘dream’ から現実の生を激しくはらむ ‘vision’ へと恋する二人の  
若者の愛が質的転換をとげている。

ジャイルズが見た ‘vision’ の中で乙女と騎士はジャイルズのいる庭で語りつづけるが、エラの言葉の中に、 ‘my words, my sin !’ という表現があり、愛を勇気に置き換

えて試した事を悔いていることが示される。次の章で論じる「かなたの地」“The Hollow Land”では神の裁き—God’s Judgement—という言葉が何度も繰り返され、極めてキリスト教的である。後にモリスは「私はキリスト者にあらず」‘I am a pagan’ と明言<sup>11)</sup>シロレンス (D. H. Lawrence) やトマス (Dylan Thomas) の思想にも通じるような原初の至福と再生及び大地信仰ともいえる自然崇拜へと向かうが、ユートピア思想及びそのような汎神論的宗教観はブレイク (William Blake) やシェリーなどから受け継ぎ<sup>12)</sup>、後世の二人に手渡したかのようである。

最後に「嵐ヶ丘」を想わせるような戸をたたき、生者の前に姿を現わす記憶の中の人として、四人の男達が語りつづけている所へエラはもう若くない姿を現わし、休ませてほしいと願う。百年前に姿を消したと言われている人間が現れてほんのわずかの休憩の場を乞い、金髪の混りあった茶色の長い髪の若者が来なかったかと尋ね、来なかった事を知り、又、旅立とうとするエラの前にロレンスが現れる。時は New Year’s Eve であり、百年後の地上での再会により愛の実現が示され、彼らの後には灰だけが残るという不気味な幻想性を帯びている。

百年という時の流れの中を互いに愛を求めて探しつづけ、死においてではあるがようやく結ばれる愛の情念の激しさを、試し合う程のすさまじい情念という極めて生々しい現実の層でそれを把え、若きモリスは描いたといえる。更に、幻想性が強まれば強まる程、愛の性質はより一層現実性を増すことが ‘dream’ から ‘vision’ への言葉の移行によって示されている。報われぬ愛を愛の至高形態とした、中世を志向するラファエル前派 (Pre-Raphaelites) の一人としてエロスの極限としての愛を天上的昇華された愛とモリスは把えている。その結果肉体を伴う愛の否定により、豊饒なる生=性は否定されざるを得ないとしても、「愛」は絶対的なものと見做され、語り継がれるべきものとして至高の地位が与えられている。その語り継がれるべきものがモリスの社会主義とユートピア思想、又その手段としての教育の問題として発展してゆくと思えるのだが、この初期の作品にも前述したように「語り」‘tale’ の性質が読みとれるように提示

されている。即ち四人の人間の内二人は語り手であり、残り二人は語りを聞く者として二人の語りの証人<sup>あかし</sup>でもあり、更に聞いた内容を他の人々に伝える次の語り手ともなるべき可能性をもった者と把えるならば、「愛」は「夢」のうちでいつまでも語り手を増やし、語り継がれるということになるであろう。結びの詩句は語り手「私」が夢から目覚めて口にした言葉であろうか。夢の中で集めて語るものよりも長く残る記憶はないとし、「夢」に支えられ語り継がれる「愛」はきらめく鉱石に例えられて、響をたて、目に触れる現実のものとして生き続ける事が強調されている。

No memory labours longer from the deep  
Gold mines of thought to lift the hidden ore  
That glimpses, moving up than I from sleep  
To gather and tell o’er  
Each little sound and sight

視覚的にも音そのものも、細く流れるような‘r’音を畳みこむように重ね、二重母音と長母音による中間韻 (internal rhyme) と頭韻 (alliteration) が紡ぎ出すテクスチャーの中で、柔らかな音の響きが夢みるように優しくゆったりと包みこむように流れている。更に行末押韻 (end rhyme) の A.B.A.B.C.と規則正しい詩形がゆったりと流れるその流れにただ徒らに情感に流されないだけの威厳と、落ちつきとを与えている。

「夢」に支えられ、語りつがれるべき「愛」は、このように節度をもった流れるような詩句で時間の流れとしても余さず示され、余韻を残しつつ物語は閉じられる。

## 第2章 はるかへの愛

「かなたの地」<sup>13)</sup> The Hollow Land=A Tale

前章で愛と妬みが裏はらの激しく試しあう愛を、旧約の神の如き愛と述べたが、モリスが掲げた良書百撰の第一番目が旧約聖書—モリスの言葉を用いると「ヘブライ人の聖書」—であった事は注目に値する。旧約聖書に次



‘Nibelungen Lied’ と附した後カッコをし、‘See Carlyle’s Miscellanies’ と書くことにより読者である同人に直接作者が顔をだして指示を与えるという幼稚な点があることは否めないが、兄弟団の思想と創作の場として発行されている雑誌の掲載作品として同人達が第一の観客になる筈であるから、このような作者の直の語りかけも許されるかも知れない。同人は発足当時のメンバーの他にロセッティーも執筆者として加っていた。ラファエル前派の思想の根底には、理性の時代、一八世紀が失ってしまった信仰の回復と、人類に対する使命として誠実な努力を続けるという意識が強く流れ、社会的階層差別を認めないという人権に対する断固たる決意があった<sup>17)</sup>。「この時代に対して聖なる戦いを挑む十字軍」として出発した兄弟団も第一期のラファエル前派達と同じ思想に立つものであったから、観客としての同人を含めて枠組構造とならざるを得ない。即ち Masque 劇という形式における劇中の劇とは、その劇の一番の中核であり、メッセージの発信地である。又その中核の廻りの枠の中で観客を演じる者たちは、その劇全体の外側で劇を観る観客と同じくメッセージを受けとる人間達でもある。だが一般の観客と大きく異なる点は、観ることが演じることであり、それと平行してメッセージを受けとる行為が同時に行われていることである。だが伝えられるメッセージが正しく理解される為には思想の基盤を同じくする者達が適しい訳であるから、思想を同じくする同人とは劇の中核から発せられるメッセージと融合している存在であり、メッセージそのものを示す存在でもある。このように観客であると同時に、演者でもある同人に直接呼びかけている作者も同人である訳であるから、作者自身も演じながら観ているのであり<sup>18)</sup>、メッセージそのものとなる。だからこそこの作品の「枠」の意義について考えた際、この同心円上を廻るだけの排他集団の自己満足に終わらない為には、民衆によって語り継がれてきた「ニーベルンゲンの歌」からの引用としてのエピグラフが枠として必要であり、その結果「愛さえあれば」と同じく雑多な層の観客を得ているのと同じことになる。このような枠組構造によりはじめて「かなたの地」は民衆によって語り継がれるべき ‘A Tale’ 「物語」という副題をもつに適しいも

のとなっていると考えられる。民衆の生の証として、語り継がれるべき教育としての「語り」ともいうべきモリスの歴史感覚が副題により明確に示されている作品であろう。

又、物語そのものの構成は三章から成り、第一章 この世での戦い、第二章 この世での敗北、第三章 この世との別れ—第一の歌、第二の歌、第三の歌となっている。このように三部構成で、第三章が更に三つの歌から成り立っていることから分かるように、ダンテの神曲を念頭に置いてのことであるのは明白なことであるが、同時に自らを「神曲」の作者ダンテの生まれ変わりと思倣していたロセッティーが先に述べたような意味で同心円上の上を廻る観客の中にいる事に最大の注意を払ってのことであろう。この頃ロセッティーに激しく心酔していたバーン＝ジョウンズとモリスを想えばその点も納得のゆくことである。エロスの極限ともいえるダンテとベアトリーチェの愛に終生執着しつづけたロセッティーの愛の把え方に、大きく共感を抱いていた筈であるから。というのも、時間的に考えても、修道院構想やマロリーの「アーサー王の死」の直接の影響下にバーン＝ジョウンズもモリスもまだあった時期であったから。更にラングラード (Jacques de Langlade) の言葉を用いればロセッティーは「皇帝<sup>カールズ</sup>」であり、「ウィリアム・モリスは芸術のために、領主は農奴の妻にたいして初夜権をもち、封臣は封主のまえで引きさがらねばならないという騎士の伝統にあふれた詩の世界に生きていたのだ」という状態に似たような立場にいたであろうと推測されるから<sup>19)</sup>。ロセッティーとモリスの妻ジェイン (Jane) の関係に対するモリスの態度はそのような過激な表現で言い表わされても仕方がない程、モリスは長きに亘って二人の関係に目をつむっていた。そこでそのような事態のまだ発生していないロセッティーとの出会いのはじめに、ロセッティーへの心酔がいかにばかばかであったかは想像に難くない。その結果いかにロセッティーを意識してこの作品が書かれたかはさ程の反論をみるものでもないと思える。

第一章、「この世との戦い」の語り出しは、かなたの地とはどこだか知っていますか、という読者への直接的な語りかけから始まり、その地は語り手 ‘I’ が愛する人

‘love’にはじめて会った土地である事が示される。即ち「かなたの地」はエリオット (T. S. Eliot) の「虚なる人々」(The Hollow Men) とは異なり、愛の存在する豊饒なる地であることが分かる。

語り手「私」は歳老いていて、記憶も定かでなく、愛する人に出会ったその時のことを読者に語りたく願っているのだが、耳や臉の奥に残るのは戦の音や光景ばかりで、「愛」はやはり戦いという行為と密接に関係していることが示される。やがて、この世は誤解や悲しみで満ちている、と語られた後、‘Yet, Who has not dreamed of it?’と反語で発せられる疑問をみると、悲惨な状況の中にいる者ならば誰でもかなたの地を夢みるに違いないと解釈でき、そこは万人の夢みる理想郷であることが最初の時点では暗示されている。

だが話しが進むにつれてかなたの地とは極めて両義的な意味をもつ豊饒と無の土地である事も分かる。即ち旅の途中で旅人が希望をもって目差していた土地と思って入りこむと、確かに豊饒ではあるが、やがてそこが真に求めていた土地ではない事に気づき、またそこを出て次の旅へと旅立ってゆかねばならないような、いつときの休息地としての「窪地」でもある。それはややもするとエリオットの虚ろなる地へと転じかねないような地でもある。

やがて記憶をしっかりと取り戻したかにみえる語り手は、自らの名をフローリアン (Florian) と明らかにし、‘The House of the Lilies’の出であると知らせる。即ち百合家<sup>リリーズ</sup>という家名が示されることにより、封建的「家集団」間の争いと、百合の花から、英仏間の百年戦争等国家間の戦いをも想起させ、戦いは大きなものであることが暗示されている。それは既にエピグラフからも連想できたであろうが、「ニーベルンゲンの歌」に適しく、主人公フローリアンの話は仇打ちの思い出から語られ、第一章のテーマは憎悪である。

荒筋はフローリアンの父の死後、兄のアーノルド (Arnold) が女王スワンヒルダ (Lady Swanhilda) から受けた屈辱に対し仇打ちに出発するというものである。屈辱を受けたのは16年前のこと。一旦は許していたのだが、王の死後、女王の暴政に怒りを覚え、やはり許せな

いとこの思いに駆られる。二人の兄弟の意識の中にあるものは神の許し給う聖戦である。辱めという極めて個人的なものから聖戦へと意識が移行することは、先に言及したが、百合家という家名に象徴されるように、家と家との争いという私的なものから、国と国との戦いという規模の大きな戦いを連想させるものであり、旧約の中の数多くの聖戦の時代から、中世封建制の時代にまで亘る、或は今この瞬間にまで亘る人間の憎悪の深さを示すものであろう。やがて女王の綺羅びやかな部屋に忍び込み、スワンヒルダを見つけるが、歳月に色香の越せた哀れな姿をみて憐憫の情に耐えない。しかし女王の顔が侵入者を判別し、憎しみの表情へと変わると先程の情も消え、15年前<sup>20</sup>の屈辱を述べ、死を言い渡す。ここで重要なのは二人が、一旦許そうと思ったことがあったという点と、哀れな姿に憐憫を感じた点である。神の許しの下に仇を打つという聖戦の意識の中にも、前章の旧約的な妬み、試す愛ではなく、新約的な許す愛が顔をのぞかせている。このように地上における愛というものの総合的な側面が「夢」と「かなたの地」の両作品で顕わとなる。仇打ちはいづれにせよ果たされ、スワンヒルダは殺される。

翌日、クリスマスの日<sup>21</sup>に女王の息子ハラルドは戦いを決意する。仇打ちにつぐ仇打ちという設定の中で、その私的な戦いが飽までも聖戦として意識されている点に作者のこだわりが感じられる。だが戦闘の地で激しく矢のとび交う中をアーノルドは敵に尻をむけ味方を率いて「丘」へと向かう。何故戦いの決着をつけずに「丘」を目差すのか。ハラルドの挑戦を尻めになぜ他の地を目差して急ぐのか。あたかもファラオに迫れるエジプトのイスラエル人の如くに、かつて自由であった地、祖先の地カナンを目差すかのように、アーノルドと共にフローリアンは丘のかなたの地を目差してその戦闘の場を去る。やがて彼らが到着するのは「ゴリアテの地」と呼ばれる荒野の中の地点で、岩だらけの険しい丘のひとつの峠をゆく<sup>22</sup>とある。ハラルドの地を出るところで第一章は終わり、ゴリアテの地が登場するのは第二章、この世での敗北の章である。ゴリアテは多年に亘ってイスラエル人を迫害しつづけたペリシテ人の中の一人の巨人である。ダヴィ

デ王により滅されたが、ペリシテ人は戦闘的な民であり、ゴリアテの地を経るには多くの困難が予想される。家畜の中にはハラルドの地へと戻るものもいた。これも荒野で飢え渴く民がモーセを呪い、むしろエジプトの囚れの身の方がよかったと呟くに似て、理想の地への巡礼の旅の困難を示している。やがて前方にはゴリアテの地、背後には後を追う敵という四面楚歌の中で戦うしかないと決意する。

何故戦いを避けて荒野へと逃れたのか、その後峠の先に自分達の地があるという所までやってきて戦闘を開始したのか。恐らく戦うには明確な夢が背後から支えなければ真の死闘はできないということであろう。「夢」においてエラもロレンスも試しあう愛の情念に生命をかけた。二人にとって愛とは生命をかけるに値するものとの愛の定義が明確であった筈<sup>2)</sup>である。アーノルドとフローリアン達が戦闘を開始するには自分達の目差す地を背後に控え、その地に支えられる必要があったのであろう。先に言及したように多義に亘る‘Hollow’という語の

—

側面から今のこの段階では、その地を夢の実現としての「愛」に到るべき、巡礼の道ゆきの、道すがらの一逗留地と呼んでおこう。それは長く苦しい旅の途中で瞬時潤いを与える仮の宿であり、美しさによって慰めと、次の歩を進めるための一層堅固な決意へと促す夢の地ととれる。その地は、苔むした岩と岩との裂け目から、かなたへと伸び広がっている青い蔭を帯びた麗しの国として描かれている地であり、峠に近づにつれははっきりとみえてくる地である。堅固さの象徴としての岩、流れた時の長さとしての伝統の重みを暗示する苔により、かなたの地とは深い象徴のなかの地であり、至福の園として、愛する人のいる地である。しかし仮の逗留地といってもモリスが終生想い描いた真のユートピアへと連なってゆく地であるので、その地へと到る旅の苦難を示すため峠が設定され、背後にその麗しい国を控えながらも一歩手前での戦は避けられないものとして描かれている。事実フローリアンは死をも辞さない態度で戦いつつも、戦の途中でこの世をつまらない所として把え、すべてを虚なるものとの思いに到るが、戦の辛さや虚無感は無罪意識とい

ってもよい罪の意識として把え直される。巡礼の道ゆきが疑いや迷い、またそのような思いに対する悔俊と、更なる確信や信頼などの繰り返しであってみれば、ユートピアへの道も同じであろう。バニャン (John Bunyan) の「天路歷程」(Pilgrim's Progress) をモリスは良書百撰の44番からはじまる「現代の創作」の筆頭に掲げているのは、キリスト者であることを否定し、「ジョン・ボールの夢」などでもはっきりと教会権威やキリスト教教義を否定したものの、理想の実現はバニャンの描く信仰の歩みと極めて似かよったものとして把えているからではないのか。

戦は敗北であった。「The road is long.」といってアーノルドとフローリアンは別れの言葉を交わし合う。この‘The road is long.’も当然のことながら生と死のいづれの方へ向かうにせよ、二人がまだ歩み続けなければならない道程を視つめてのことである。アーノルドはまもなく死へと向かうのであるが、死に到る準備としてか、女王スワンヒルダを殺したことは正義の為の勇敢な行為ではなく、つまらない仇討に過ぎなかったと考えを改め、神の許しを求める。ここで聖戦の意識を作者は否定し、消し去っている。後年社会運動に身を投じるモリスの生涯も、或る意味で聖なる戦の連続であった訳だが、封建的仇討を聖戦という錦の旗で隠し、武力をもって人命を奪うことをよしとするような取り違えを物語の出だしから意図的に正している筋の運び方である。それはかなたの地で愛する人に出会い、生きる為に苦しむ人間ひとりひとりの生の尊さを暗示するかのようになり、女王スワンヒルダも生の最中で苦しんだのだと、フローリアンが愛する人から悟し教えられることから伺える。

戦闘途上の難関としての峠であるゴリアテの地は変わることなく同じ場所にあるのだが、その背後に美しい描写でかなたの地が描かれ、生の戦いの一休息が示される。その地は木々や花や穀物に溢れ、緑や青や紫に色どられた地である。だがアーノルドにとっては生を終わるべき地であった。一人の人間を死へと到らせたその代価を、自らの死をもって支払ったのであろう。その実に勇ましい行為を愛と許しととるならばアーノルドの死はその為であると言える。そこで死すべき地であったにせよアー

ノルドにとってもかなたの地はこの世の愛のゆきつく先と言えよう。少なくとも死を決意し、その先が視えない人間にとっては、その地で死を迎えたいと願う地ではなかったか。事実フローリアンも意識を失い気づいてみると涼しい緑の光に包まれた甘美な地にいた。やがて妙な声ははっきりと聞こえてくる。ここで第三章この世との別れ、第一の歌に入る。

Christ keep the Hollow Land  
Through the sweet springtide,  
When the apple-blossoms bless  
The lowly bent hill side.

香しき春 キリストは  
ひねもすかなたの地を守り給う  
こうべを垂れし丘の斜面を  
りんごの花が喜び祝うとき。

この地で「私」は愛する人に会う。流れの辺りにゆったりとした衣に身を包み、足は履物をはかず、ふさふさとした長い髪乙女。忍び返しに緋色の光が喉もとから白の衣に映えて衣の襞の中に影となり、足もとに到るにつれて小さく消えてゆく。そんな牧歌的な乙女。これはモリスの愛する女性の原型である。晩年の作品「世界のかなたの森」(The Wood Beyond the World)の乙女も風のように野を素足で駆ける乙女<sup>22)</sup>である。乙女は包み込むように優しい。しかしその優しさは「私」が経ねばならない困難を予想しているからで<sup>23)</sup>、一時の慰め手のような形で描かれている。だが乙女はひたすら美しく優しいだけではない。前述したように公正な判断力に富み、アーノルドとフローリアンの行った行為は卑しい行為で神の裁きに値するものであるとフローリアンを悟す判断力にも富んでいる。その言葉でフローリアンは一切の呪縛から解かれたかのように乙女に対し自然な愛の仕草がとれるようになる<sup>24)</sup>。

外からみていた限りかなたの地は限りなく美しい地であった。だが実際中に入ってみると、自然そのものも単に美しいだけではなく、困難の象徴であろうか、大きな

石がいくつもあり、陽の光も気の遠くなる程激しく、厳しい現実も同時に存在する所である。又神の裁きなる意識についても言及される所であってみれば、どこか練獄めいた性質も帯びていて現実と理想の間地点ともいふべき地である。しかし愛する人に出会い突極的には結ばれるのであるから、たとえ死後の世界への入口的場所であったとしても、愛の成立し得る現実の場として捉えられている。だが永遠の安らぎの場として捉えることの出来ない場所でもある。そこでかなたの地は天に次いで第二に良い所であることが読者である同人達に向かって語りかけられている。更に二人の幸せ、そんなものについては語れないと言ひ、その地を失うまですと住ったと告げるだけでどんな幸福を得たのか、またいつまで住んでいたのかは一切語られない<sup>25)</sup>。少なくとも永遠に住むべき場所ではなく、いつか又旅立たねばならない所であって、前述したようにはじめ希望の目的地とみえても、やがて違うことに気づき、結果としては次の出発のための道すがらの一逗留地となる場所であることは明らかである。愛する人の名もマーガレット (Margaret) として明かされ、更なる現実性を示した所で筋は第二の歌へと移行し、マーガレットも姿を消す。

第一の歌に入った時点でアーノルドの名は別として、フローリアンは「私」という語り手として名を秘める。乙女の名は伏されたままであった。それはフローリアンの巡礼の旅の途上で、二人の関係はフローリアンを旅をするに適しい成人した男子となすべき通過儀礼のような形をとって語られている。それは異性に対する極めて両義的な感情と行為が、愛の成就を疑わしいものとし、モリス文学に特有の死の世界においてしか結ばれないような、生身の男女に対する愛の危惧があったからではないのか。しかし神の正義が語られ、王ユレイヌを失って、同じく悲しい思いをしていたであろう女王スワンヒルダへの思い遣りが愛する人の口から説かれるとそこではじめてフローリアンは乙女を胸にい抱くことが出来た訳であるから、夢想だけの極限のエロスの世界からもっと人間相互の愛へと目覚めたことになる<sup>26)</sup>。次章でハラルドとフローリアンの和解が成立するが、人間相互の愛に目覚めた今や、物語の本筋ににおける誤った行為とその許

し合いという真の愛の方向に再び旅立つ以外ないことが読みとれる。第三章が「この世との別れ」であっても、それは今まで述べてきたように死の世界に入った訳ではなく真の愛の目覚めと許しの世界という神的世界を讀者に告げる或る種の「地上天国篇」とも言えよう。更にモリスの作品が成長と教育という点からも常に語られると前述したが、この初期の作品においてもそれらは一貫しており、顕著に表れている。

第二の歌は和解の章である。長きに亘った二つの家と仇討という壮絶な行為の後の真の和解が成立し、今度は、フローリアンとハラルドの二人でかなたの地を目差して出発することになる。だがハラルドは途中で出会った女性のためそこに留まりフローリアン一人で行くことになる。脱落者もあり、正に厳しい巡礼の道程に他ならない。最後の第三の歌へと向かう前に、この第二の歌は二人の描く「神の裁き」の絵の色彩や、数字、更には或王の葬列など神秘的な象徴に満ちた箇所である。

第三の歌は語り手「私」が再び幸せを心に感じ、若がえったかのように感じながら、再び愛する人の歌「キリストはかなたの地を守り給う」を耳にするという希望の章である。彼はマーガレットに出会い、二人は荘厳な町の門の前にやってきて、自分達は遠い昔に出合った二人であることを認める。やがて二人はその黄金の門の戸を開く。二人の前には花の大空間が広がる<sup>27)</sup>。ロセッティの強い影響もあったのであろうが、前生で出会った女性と再び運命的邂逅を遂げたかのように、二人の前には花園が広がっているという語りで物語は終わる。二人は中に入ったとは作者は書いていない。入れば又同じ事の繰り返しであることがわかっているからであろう。又、モリスは遙か遠い昔にと言うだけで「前生」という言葉は用いてはいない。‘Quest’—欣求の旅—のゆくさきは穏やかなユートピア思想に裏づけられた社会主義への道であり、人類愛としての普遍的「愛」と共に歩んで向かってゆくアーツ・アンド・クラフト・ユートピアとも呼ばれる理想郷であろう。次章においてアイスランドから戻ったモリスが自己の思想を詩情豊かに擬古典文でかいた、「愛」をもとめての欣求の詩「愛さえあれば」の分析を通して、「ユートピア便り」“News from Nowhere”及び

後期ファンタジー・ロマンの世界への道程を探りながら、「愛のゆくへ」としてのモリスのユートピア思想の意味を明らかにしたい。

## 註

モリスの作品からの引用は、‘The Collected Works of William Morris 24 Volumes (Routledge/Thoemmes Press & Kinokuniya Co., Ltd 1992)による。

- 1) フィリップ・ヘンダースン「ウィリアム・モリス伝」川端康雄 他訳 P.70 晶文社 1990
- 2) 雑誌名は最初「兄弟団」とする予定であった。Ibid P.51
- 3) ‘tale’ という語はモリス文学を解く key word であるように思う。特に社会主義者としてのモリスと二度のアイスランドの旅を経た後の文学者モリスの作品の中で、モリスの歴史感覚を知る上で不可欠な言葉であろう。‘tale’ とは人から人へと語りつがれるもの、何らかの出来事が生きた証人をもって（「夢」の中では、4人の内 Osric と Herman は何も語らないが、出来事の証人という形をとっていると考えられる。）つぎつぎと世代を下ってゆくものというようにモリスは把えていたと思われる。それは終局的には民衆を出発点として広く人類にまでゆきつく生命の継承という意味で、モリスの死生観をも限定する言葉であるようだ。即ちモリスが最終的に到達する「愛」の概念を世間に知らせるための方法である。但し、「ジョン・ボールの夢」の成立過程をみても、‘story’ と ‘tale’ との明確な定義づけがない。今後の研究を期待したい語である。Vol.I A Dream P.160
- 4) Ibid. P. 162
- 5) W. T. Stead の要請に応じ、‘Pall Mall Gazette’ に印刷されたモリスの選んだ 54 冊の「良書百撰」のリストには、ヘブライ人の聖書として旧約聖書が第一番目にあげられている。  
V o 1  
XXII Introduction Xiii
- 6) A. Hodgson The Romance of William Morris Cambridge Univ. Press 1987 P. 195
- 7) “...to build up little by little the new day of fellowship, and rest, and happiness.” “...then it may be called a vision rather than a dream.”
- 8) モリスとバーン＝ジョウンズは想像世界の中で互いに交わった。バーン＝ジョウンズの言葉ではあるが、「私は現実世界よりも、もっと真実である、あの不思議な国をいつでも旅しているのだ。」ヘンダースン P.58 又モリスは“The Story of the Unknown Church”の中で、語り手 Walter に ‘in my dream I could see even very far-off things much clearer than we see real material things on the earth...’ と語らせている。  
P  
154-155
- 9) クリミア戦争の進行中、1854年にはコレラが蔓延した。
- 10) Carole Silver は尼僧を転生した Ella と抱え、看護婦として働

- く姿を、義務を遂行する者、即ちエロスから、高時元の愛への昇華と解釈している。更に sin を自覚し、growth の作品として“The Hollow Land”を位置づけている。Calole Silver *The Romance of William Morris* Ohio Univ. Press 1982 P. 10
- 11)Vol. XX11 Introduction XXXij Mr. Cockerell の “Notes of a biographical talk by William Morris at Kelmscott House.
- 12)Ashton Nichols *The Journal of the William Morris Society* Vol. X No. 4 Spring 1994 PP. 20-27
- 13)*The Hollow Land* の邦訳は「虚なる地」であるが、‘Hollow’ という語の多義的な用いられ方から「虚なる地」と直訳すると誤解を生じるので「かなたの地」とした。
- 14)Vol. XXII Introduction Xij
- 15)J. Tompkins は Bryher の言葉、‘(Morris) never attained again the greatness of the Hollow Land’ を引用しながら、It depends, no doubt, what we are looking for.’ としながらも *The Hollow Land* の作品としての価値を肯定している。ヘンダーソンの言うように、若さのやり気で書かれた未熟な作品とは言い切れない。J. M. S. Tompkins *William Morris an Approach to the Poetry* Cecil Woolf London 1988 P. 41
- 16)Lawson も *The Hollow Land* をオックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジンの為に書かれた作品の中で、最も野心的なものと考えている。概して Lawson の捉え方は象徴的心理的アプローチであるが、作品 *The Hollow Land* のもつ意義は充分評価している。R. Bland Lawson *William Morris’s “Embodiment of Dreams” A Dissertation for Ph D.* The Florida State Univ. 1991 P.56
- 17)William Gaunt *The Pre-Raphaelite Dream* PP. 11-18 Reprint Society Ltd. 1943
- 18)Lawson は “The Story of the Unknown Church” と “Golden Wings” の二つに関して “...the narrators hold our interest as characters apart from the stories they tell. And their manner of telling them has that peculiar sense of awareness of self associated with a dream, the sense of being both an observer and a participant in the action at the same time.’ と述べている。Lawson P42 この点はモリスの作品全般について言えることであろう。即ち、夢と夢でないものとを明確に区別し、現実と夢に分けない点であり、その結果、「仕事」を「夢の具体化」と捉えるようなモリスの行動原理が観ると同時に演じるものとなっていると考えられる。
- 19)Jacque de Langlade *Dante Gabriel Rossetti* p. 257 山崎庸一郎・中条省平共訳 みすず書房 1990
- 20)16年前と先にあった。15年というのはモリスの書き間違いであろう。
- 21)大槻憲二 モリス「愛・即・死の詩人」としてモリスを捉えている。研究社英米文学評伝叢書 57 1935 P. 119
- 22)素足は大地との直接の接触を示し、男女の愛と同朋愛の豊穡なる実りの象徴と C. H. Oberg は捉えている Charlotte H. Oberg *A Pagan Prophet William Morris* Univ. Press of Virginia 1978 P. 125
- 23) “To-morrow you may perhaps have something hard to do or bear, I know, but now you must be as happy as you can be, quietly happy. *The Hollow Land* P. 276
- 24)強い憧憬によるのか、恥らいだけとは思えないような、異性に対する恐怖感が shudder, dread, grieve, struggle などの単語から感じとれる。この点は ‘Love is Enough’ でも愛の成立を巡って同じような論議がなされる場所である。Ibid. P.277-278
- 25)Ibid. P. 280
- 26)Ibid. P. 280 モリス文学に登場する女性達が悉く聡明で思慮に富んでいる事も、モリスへの心理学的アプローチの点から議論の絶えない点であるが、その点からしてもこの女性はモリスの好む女性の原型である。
- 27) J. Tompkins は二人が *The Hollow Land* へ入った—They enter—としているが、‘And then we walked together toward the golden gates, and opened them : and no man gainsaid us. And before us lay a great space of flowers.’ と語られているだけで入ったとは言っていない。この点は ‘Love is Enough’ においても愛は成就したのか、或いはしないのかで意見が分かれるのと同じ点である。だが J. Tomkins は ‘the Hollow land’ とは作者モリスにとっても漠然としか分からない  
な  
いものであるとしている。Tompkins P. 40